

「男色」と「Urningたる素質」

『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象

黒岩裕市

はじめに

森鷗外が『スバル』（明治四二年七月）に発表した『キタ・セクスアリス』は二つの時代が交錯したテクストである。一つは、主人公の金井湛が位置している、「自然派の小説」（森1972：86）が盛んに発表された明治四〇年代である。もう一つは、金井が一人称の語り手となり、自ら綴った「性欲の歴史」（森1972：90）に含まれる時代で、彼が六歳で廃藩置県が行なわれた明治四年から、二一歳でドイツに留学するまでの期間に相当する。

その「性欲の歴史」の中で、「僕」、すなわち金井がかつて所属していた、明治一〇年代の男子学生集団の「男色」が語られる。近代日本の男性同性愛の歴史に取り組んだ、古川誠「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」や、グレゴリー・フルーグフェルダー『欲望の地図作製法——一六〇〇年から一九五〇年までの日本の言説における男同志のセクシュアリティ』、前川直哉「明治期における学生男色イメージの変容——女学生の登場に注目して」でも、『キタ・セクスアリス』の「男色」表象は明治初期の男性同性愛を論じる際の手がかりになっている。

それと同時に、テキストで回顧的に語られる「男色」には、金井が存在する明治四〇年代の見解、具体的に言えば、医学、特に精神医学の見解が指摘できる。生方智子『キタ・セクスアリス』と男色の問題系——ジェンダーとセクシュアリティの結節点に向けて』やジム・ライカート『男同士——明治文学における男同士のセクシュアリティの表象』でも、このテキストの男性同性愛表象の二重性が論点になっている。

本稿は、これら先行論を踏まえつつ、『キタ・セクスアリス』における「男色」の表象と医学・精神医学言説の関係性を具体的に検討するものである。まずは、テキストで明治一〇年代の「男色」がどのように表象されるのかを確認することから始めよう。

なお、「homosexuality」の訳語である〈同性愛〉とは、西洋の精神医学に触発され、大正時代にブームになった性欲学が作り出した言葉であり、明治四〇年代に使われることはほとんどなかった。だが本稿では、「男色」や後で問題とする「Uring」を含めた、同性間の欲望や性行為を示す総括的な言葉として〈同性愛〉を用いる。

一 「硬派たるが書生の本色」

このテキストで「男色」が最初に語られるのは、「僕」が一歳の時に入学した「独逸語を教へる私立学校」（森 1972：109）の場面である。そこには次のような一節がある。

学校には寄宿舎がある。授業が済んでから、寄つて見た。ここで始めて男色といふことを聞いた。僕なんぞと同級で、毎日馬に乗つて通つて来る蔭小路といふ少年が、彼等寄宿生達の及ばぬ恋の対象物である。蔭小路は余り課業は好く出来ない。薄赤い頬つべたがふつくりと膨らんでゐて、可哀らしい少年であつた。その少年といふ詞が、男色の受身といふ意味に用ゐられてゐるのも、僕の為めには新智識であつた。僕に帰り掛に寄つて行けと云つた男も、僕を少年視してゐたのである（森 1972：110-111）。

この一節からは当時の男子学生の「男色」が年齢差を基盤としていたこと、さらにそれに対応した能動／受動という役割分担があつたことが読み取れる。「僕」も「僕」を「少年視」する学生に対して、「嫌であつたが、年長者に礼を欠いではならない」と思い、「僕」をレイプしようとする学生も「長者の言ふことを聴かなけりやあ、布団蒸にして懲して遣れ」と自身が「年長者」であることを全面に押し出している（森 1972：111-

112)。

「僕」は父親にこの出来事を告げる。だが、「びつくりなさるだらう」という「僕」の予想にも反して、「うむ。そんな奴がをる。これからは気を附けんと行かん」と父親は「平気」な様子を見せる。「僕」はそこから「男色」とは、学校で「嘗めなければならぬ辛酸の一つであつた」という結論を引き出す(森1972:111-112)。ここからは、学校という空間では、多くの男子学生が「男色」に関与し得ると考えられていたことがわかる。

『キタ・セクスアリス』の発表直後に、同書の「男色」表象を批判した作家の河岡潮風も、「学生として中学を卒業する迄には、如何にしても全く男色を知らずに過ぎる訳には行かぬ」(河岡1909:68)と当時の学校で「男色」が特殊なものではなかったことを記している。イヴ・コゾフスキー・セジウィックの言葉を借りれば、男子学生の間で同性愛は特定の個人だけに「局所化 (minoritizing)」されていたのではなく、多くの学生に「一般化 (universalizing)」していったのである (Sedgwick 1990 = 1999: 10)。

男子学生集団の「男色」に関しては、「僕」が二三歳になった時に入った東京英語学校の寄宿舎でより詳細に語られる。東京英語学校は「十六七位なのが極若いので、多くは二十代」と

いう年齢差のある男子学生によって構成されており、「僕」は最年少であった。ここでは、学生は「軟派」と「硬派」に分かれていた。前者が女性、後者が少年を嗜好する集団である(森1972:113)。その「軟派」と「硬派」の関係は次のように述べられる。

軟派は数に於いては優勢であつた。何故といふに、硬派は九州人を中心としてゐる。その頃の予備門には鹿児島の人はいないので、九州人といふのは佐賀と熊本との人であつた。これに山口の人の一部が加はる。その外は中国一円から東北まで、悉く軟派である。／その癖硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護い処があるやうに見えてゐた。紺足袋小倉袴は硬派の服装であるのに、軟派も其真似をしてゐる。只軟派は同じ服装をしてゐても、袖をまくることが少い。肩を怒らすることが少い。ステツキを持つてもステツキが細い。休日に出外する時なんぞは、そつと絹物を着て白足袋を穿いたり何かする(森1972:114)。

「硬派／軟派」は地理的に分類されている。東京英語学校には「鹿児島の人」は少なかったと記されているのだが、明治期の「男色」はしばしば、九州、特に薩摩から東京にもたらされる

ものとして表象された(古川1994:32-35; Pfugfelder 1999: 221-222)。

九州出身という限定が加わるため、「硬派」は少数派である。だがそれにもかかわらず、学生集団では「硬派たるが書生の本色」ととらえられており、「紺足袋小倉袴」という「硬派」の服装を「軟派」も真似している。「硬派」は異端視されるどころか、正統なものと見なされていたのである。

それに対して、「軟派」は「影護い処があるやうに見えてゐた」という。その背景には、「女色」が男子学生を「墮落」(森1972:126)させるという考え方があった。実際に「軟派」が向かう先は「芝、浅草の楊弓店、根津、吉原、品川などの悪所」(森1972:114)であり、殖生や安達といった美少年は「楊弓店の女」(森1972:125)や「根津の八幡楼といふ内のお職」(森1972:141)を通じて「墮落」する顛末をたどることになる(森1972:126, 142-143)。「男色」に対しては「平気」な様子を見せていた金井の父親も、「僕」が殖生と小料理屋に行ったことを耳にすると、「何か殖生と一しよに悪い事をしはしないか。したなら、それを打明けて言ふが好い」と「僕」を問う詰める(森1972:125-126)。

「女色」を「墮落」の元凶と位置づけ、それゆえに「男色」を正統化する見解は『キタ・セクスアリス』だけに見られるもの

ではない。たとえば、金井の学生時代に重なる明治一八一九年に発表された坪内逍遙の『当世書生気質』に登場する桐山勉六という学生も、「男子をして文弱に流れしむる原因」として「女色」を挙げ、「互に智力を交換すること」、「アムビション」(大志)を養成するといふ利益」を根拠に「龍陽主義」を唱える。桐山が言う「龍陽」とは「男色」の意味である(坪内2002:142-143)。さらに、『キタ・セクスアリス』と同年に発表された永井荷風の『祝盃』でも、主人公の「私」は「尋常中学」を振り返り、「海国男児が慷慨悲憤の意気を養ふに是非必要である」という名目で、当時、「男色」が盛んに行なわれており、「女色」のほうは「学生が道徳上恐れ戦く禁制」であったと語る。なお、「私」はそれゆえに「いつそ大胆不敵に女色を敢てしやう」と意気込む(永井1964:153-155)。

『キタ・セクスアリス』に戻ろう。一五歳になった「僕」は古賀鶴介という学生と同室になる。古賀は「顴骨の張つた、四角な、緒ら顔の大男」で、「安達といふ美少年に特別な保護を加へてゐる」。古賀が「硬派中の鏘々たるもの」であるため、「僕」は、「獅子の窟に這入るやうな積」で彼の部屋へ移った。実際に古賀は「去年の秋頃から僕(金井)に近づくやうに努め」ていた。だが同室になってからは、「僕」を「少年祝」することはない。「少年祝」されなければ、「硬派」の学生に「面

白い小僧だ」と上下関係でとらえられても、「僕」は嫌悪感を抱かず、むしろ「無邪気な大男」の古賀に好感を持つ（森 1972: 130-134）。そして「僕」は、古賀と古賀の友人である美青年の児島十二郎とともに「三角同盟」（森 1972: 138）を結成する。『キタ・セクスアリス』の「男色」表象に取り組むうえで、この「三角同盟」は欠かせないものである。

古賀はいつもは「酒を飲んでぐうぐう寝てしまふ」。しかし、「月に一度位荒日がある」。「荒日」とは、「性欲の獣」が「暴れる」日のことであり、その日に彼は「下の級の安達といふ美少年の処なぞへ這入り込む」。「僕」は「性欲」を「獣」にたとえ、それを抑えることを「清潔」や「神聖」と見なしているのだが、古賀自身もそうした見解に同一化している。彼は「しをしをとして、昨日は獣になったと云つて悔むのだ。一方、児島の「性欲の獣は眠つてゐる」。したがって、女性に対するものである。男性に対するものであっても、「性欲の獣」を縛ることは、要は禁欲することが「三角同盟」の基盤になっていたと言えるだろう（森 1972: 138）。

「三角同盟」では、「性欲」が「獣」のメタファーで語られ、その抑制が求められる。だが、「男色」と「女色」の位置づけは異なったものである。「僕」は次のように語る。

平生性欲の獣を放し飼にしてゐる生徒は、此 *triumviri* の前では寸毫も仮借せられない。中にも、土曜日の午後白足袋を穿いて外出するやうな連中は、人間ではないやうに言はれる。僕の性欲的生活が繰延になつたのは、全く此三角同盟のお蔭である。後になつて考へて見れば、若し此同盟に古賀がゐなかつたら、此同盟は陰気な、貧血性な物になつたのかも知れない。幸に荒日を持つてゐる古賀が加はつてゐたので、互に制裁を加へてゐる中にも、活気を失はないでゐることを得たのであらう（森 1972: 138-139）。

「性欲の獣を放し飼にしてゐる」学生の中でも、「白足袋を穿いて外出するやうな連中」、すなわち、「軟派」が非難的になっているのである。ここで「三角同盟」は「硬派たるが書生の本色」という見解を体现している。しかも引用した一節で、「僕」が古賀の「荒日」を「活気」と結びつけ、「三角同盟」を「幸」にも「貧血性」から守ったと肯定的に解釈している点にも注意する必要がある。生方が指摘するように、この一節が『キタ・セクスアリス』で「性欲」が否定されない唯一の箇所なのだが、それは古賀の「男色」を指しているのである（生方 1998: 42）。

二 「異常な性癖を持つて生れたのではあるまいか」

以上のように、金井湛は一人称の語り手になり、明治一〇年前後の男子学生の「男色」を回顧している。しかし、そもそも彼が分析の軸とする「性欲」とは明治四〇年代の概念である。

斎藤光によれば、明治二〇年代から医学領域では、「性欲」は食欲も含めた「本能的衝動」を指す語として使われることはあったが、今日用いられる“sexual desire”の意味には限定されていなかった。そしてごく早い時期に、この意味で「性欲」を用いた人物が他ならぬ森鷗外であった（斎藤 1996: 231）。

鷗外は明治二九年、文芸評論『月草』の「叙」で、ゴンクール兄弟やフロベールの「自然主義といふ名の附いた一種特異な産物」を論じる際、彼らが「性欲すなはち劣等な色氣を行為の唯一の原動力にしたやうな人物を写す」ことを、「いはゆる病理を詩の種子に使ふ」と批判した（森 1973: 294）。この一節で「性欲」が一時的な「行為」のみならず、それを引き起こす「原動力」と見なされている点は重要である。「性欲」は個人の内部に存在するものとして定義されているのだ。その後鷗外は、衛生学の教科書『衛生新篇』にも収録されることになる医事評論「性欲雑説」（明治三五—三六年）などで、“sexual desire”という意味で「性欲」を用い、この言葉を医学や衛生学の領域

に浸透させた。

『月草』「叙」における批判が示すように、明治二九年の時点で、鷗外は西洋の自然主義文学に皮肉を込めた眼差しを向けていた。だが、日本では明治四〇年代に自然主義がブームになった。『キタ・セクスアリス』の金井はそうした時代に位置しており、テキストの冒頭で匿名の語り手が金井を語る部分には、次のような一節がある。

金井君は自然派の小説を読む度に、その作中の人物が、行住坐臥造次顚沛、何に就けても性欲的写象を伴ふのを見て、そして批評が、それを人生を写し得たものとして認めてゐるのを見て、人生は果してそんなものであらうかと思ふと同時に、或は自分が人間一般の心理的状态を外れて性欲に冷淡であるのではないか、特にfrigidasとでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいかと思つた（森 1972: 86）。

ここで金井は「自然派の小説」による「性欲的写象」の氾濫の中で、自分自身が「冷淡」、あるいは“frigidas”なのではないかという疑念に苛まれている。とりわけ、「frigidas」とでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいか」という一節からは、金井が“frigidas”なる「異常な性癖」を生得

的なものと考えていることが読み取れる。

こうした不安に「何か書いて見ようといふ、兼ての希望」が合流し、さらに、そこに高等学校を卒業した長男への「性欲的教育の問題」が加わって、金井は「性欲といふものが人の生涯にどんな順序で発現して来て、人の生涯にどれ丈関係してゐるかといふこと」、すなわち、自己の「性欲の歴史」の執筆を決意し（森 1972: 89-90）、次のように述べる。

実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考へて見たことがない。一つ考へて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はつきり書いて見たら、自分が自分でわかるだらう。さうしたら或は自分の性欲的生活が normal だか anomalous だか分かるかも知れない（森 1972: 90）。

金井は「性欲」を“normal/anomalous”と二分し、それについて語ることが「自分が自分でわかる」ことになることとえている。つまり、「性欲」が自己のアイデンティティを構成する主要な要素として解釈されているのだ。

その過程で参照されるのが、「Lombroso」や「Möbius 一派」といった精神医学者の見解である。このテキストに、セクシュアリティ研究における代表的な精神医学者クラフト＝エビング

の名前は登場しないが、彼の主著 *Psychopathia Sexualis*（一八八六年）の主題である“Sadist”や“Masochist”については言及されており、それらが「性欲の変態」と括られる（森 1972: 89-90）。長男への「性欲的教育」にしても、金井を鼓舞したドイツから送られた報告書には「教育家」や「宗教家」だけではなく、「医学者」の意見も含まれていた（森 1972: 90）。要するに、「哲学が職業である」（森 1972: 86）にもかかわらず、金井が「性欲」を理解する方法は「医学者」、とりわけ、精神医学者のそれに近いのである。

金井が論じようとする「性欲の変態」とは「冷澹」であるかどうか、換言すれば、「性欲」の量による「変態」である。それは、サディズム・マゾヒズム、フェティシズム、ホモセクシュアリティのような「性欲」の対象による「変態」とは性質を異にしている。とはいえ、「自然派の小説」の「性欲的写象」はヘテロセクシュアリティを扱ったものであり、そうしたヘテロセクシュアリティに対して「冷澹」ということは、精神医学ではホモセクシュアリティに近いと解釈された。

実際に、クラフト＝エビングは「色情冷淡」と「同性色情」を関連づけて論じている（Kraft-Ebing 1886 = 1913: 284）。したがって、暗示的なレベルにとどまっているものの、金井が精神医学の見解に立脚している以上、彼の「性欲の歴史」が綴ら

れる出発点には、“frigiditas”と近接する「(Homosexualität)とでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいか」という不安が隠れているのではないだろうか。

三 「僕にはUrningたる素質はない」

明治四〇年代に位置する金井は、「性欲」を“normal/anomalous”と二分し、生得的なものと考える精神医学の見解に立脚している。そのため、『キタ・セクスアリス』の「男色」表象には混乱が生じてしまう。以下、本稿ではそうした混乱に注目し、このテクストを読みなおす。

まず問題となるのが、「僕」が一歳の時に入學した「私立学校」で、「男色といふこと」を知る場面である。先ほども引用したが、そこには次のような一文が付け加えられていた。

その少年といふ詞が、男色の受身といふ意味に用ゐられてゐるのも、僕の爲めには新智識であつた。僕に帰り掛に寄つて行けと云つた男も、僕を少年視してゐたのである。〔……〕そのうちに手を握る。頰摩をする。うるさくてたまらない。僕にはUrningたる素質はない(森1972:111)。

引用した箇所の前半では年齢差に基づいた「年長者／少年」という区分が明示されている。だが、最後にそれとはまったく別の「Urningたる素質」が持ち出され、その有無を根拠に「僕」自身の同性愛の欲望が否定される。

こゝで「Urning」という言葉について概説しよう⁽²⁰⁾。「Urning」とは、一八六四年、ハノーヴァー王国の陪席判事であったカール・ハインリヒ・ウルリヒスが著書『ウィンデクス』で考案した新語で、男性同性愛を“anima muliebris virili corpore inclusa”すなわち、「男の身体に閉じこめられた女の靈魂」によって説明するものであった。彼は、人間の胎児は子宮内では男性器・女性器双方を有し、成長するにつれてどちらか一方を失うという同時代の生物学の知見にヒントを得て、「Urning」を生得的なものととらえた。ウルリヒスが法律家であったことが示唆するように、「Urning」はもともとと医学とは一線を画した概念であり、彼自身もそれを病理というよりは突然変異的なものと解釈していた。しかし一九世紀後半になると、精神医学者のクラフト＝エビングらが「Urning」を“Homosexualität”等々と互換的に使用し、この語は病理化されることになった(月川1995:176-183; Greenberg 1998:408)。

それでは『キタ・セクスアリス』の「Urning」をどのように読むべきか。なるほど、男子学生集団で「少年」は「年長者」

である男性とは異なる存在、「男色の受身」と見なされており、その点ではジェンダー倒錯に基づく「Urning」との共通性も見出せる。だが、「少年」は成長して男性になる。一方、「Urning」は「素質」によって固定的に規定されるものであり、特殊な「種」(Foucault 1976: 59)を形成する。それは「trig-dias」とも名づくべき異常な性癖を持つて生れたものではあるまいか」と不安になる、明治四〇年代の「僕」の眼差しと共通したものであり、「男色」を「嘗めなければならぬ辛酸の一つであつた」と結論づける、明治一〇年代の「僕」の眼差しとは相容れないものである。セジウィックの言葉を再び借りれば、同性愛を「一般化」する眼差しに、それを「局所化」する眼差しがクロスしているのだ。このような二重性がテキストを混乱させることになるのである。

一三歳の時に入学した東京英語学校でも「僕」は最年少であり、年長の学生から「少年視」される。そこで埴生という学生を引き合いに出して、「僕」は次のように語る。

僕は硬派の犠牲であつた。何故といふのに、その頃の寄宿舎の中では、僕と埴生庄之助といふ生徒とが一番年が若かつた。埴生は江戸の目医者の子である。色が白い。目がぱつちりしてゐて、唇は朱を点じたやうである。体はしなやかである。

僕は色が黒くて、体が武骨で、その上田舎育である。それであるのに、意外にも硬派は埴生を付け廻さずに、僕を付け廻す。僕の想像では、埴生は生れながらの軟派であるので免れるのだと思つてゐたのである(森 1972: 115)。

「一番年が若かつた」ため、「硬派の犠牲」となったという前半は、まさしく年齢差に基づく「年長者／少年」の区分に合致している。だが続く一節では、「硬派」が埴生を「付け廻さ」ないのは、彼が「生れながらの軟派」であるためだと解釈される。しかし、当時の男子学生の間では「墮落」へと繋がる「女色」が忌避されたために、「男色」が行なわれ、また、それがある意味では正統化されていたという背景があった。少なくとも「硬派／軟派」の区分は先天性なものではない。ここにも、「素質」を重視する精神医学の眼差しを見て取ることができるとではないか。

その一方で、仮に精神医学の眼差しに従い、「Urning」たる素質の有無によって「生れながら」に「硬派」か「軟派」かが決定されると解釈し、「硬派」に狙われない埴生を「生れながらの軟派である」と見なすとすれば、「硬派」に追い回される「僕」には「硬派」たるべき「素質」があるということになってしまう。今度は、「僕」には「Urning」たる素質はない」という

先ほどの断言と齟齬をきたすのである。

さらに、「三角同盟」に触れた一節では、古賀が安達を「女色」によってもたらされる「墮落」から救おうとする場面が描かれるのだが、その古賀に関して「僕」は次のように語る。

古賀の単純極まる性質は愛す可きである。併し彼が安達の爲めに煩悶する源を考へて見れば、少しも同情に値しない。安達は寧ろ不自然の回抱を脱して自然の懷に走つたのである（森 1972: 142）。

「僕」はたとえそれが「墮落」であっても「女色」を「自然の懷」ととらえ、安達と古賀との「男色」を「不自然の回抱」と位置づける。「男色」が「自然／不自然」の二元論のもと、「不自然」と見なされているのだ。しかし、それは「硬派たるが書生の本色」という明治一〇年前後の学生集団の論理とは一致しない。ライカートが指摘するように、「男色」を「不自然」と見る眼差しは、精神医学における“normal/anomalous”の二分法に他ならない（Reichert 2006: 223）。

ところが、こうした「自然／不自然」の境界線も奇妙に歪むことになる。本稿では、「硬派中の錚々たるもの」であった古賀の結婚に目を向けたい。古賀が結婚する直前、彼と「僕」と

の間には次のようなやり取りが行なわれる。

古賀は某省の参事官になつて、女房を持つて、女房の里に同居して、そこから役所へ通つてゐる。児島はそれより前に、大阪の或会社の事務員になつて、東京を立つた。それを送り、新橋へ行つたとき、古賀が僕に囁語いだ。「僕のかかあになつてくれるといふものがあるよ。妙ではないか。」これは謙遜したのではない。児島に比べては、余程世情に通じてゐる古賀も、流石三角同盟の一隅丈あつて、無邪気なものである。僕は妙とも何とも思はなかつた（森 1972: 155）。

古賀の言葉によれば、彼にとって女性は「かかあ」、つまり、家父長制を維持するための妻であり、母である。「僕」が求めながらも実現できない「青年男女のロマンチックな恋愛」（森 1972: 141）などは眼中にない。そのうえで、自身の結婚については「妙ではないか」と付け加えている。

もっとも、ここで彼が表明している違和感は、「硬派」であったかというより、女性を完全に排除した「三角同盟」の一員であったことに起因するのだろう。また、「硬派」であったとしても、「硬派」から「軟派」へと「軟化」（森 1972: 130）した学生のエピソードが示すように、学校を出てから結婚する

ことは、当時の学生にとっては決して「妙」なことではなかっただろう。しかし、語り手の「僕」は、「男色」表象の出发点において同性愛を特殊な「Urningたる素質」によって規定していた。そうである以上、彼は古賀の結婚を「妙」なものと判断しなければならぬ。ところが、「僕」は「妙とも何とも思はなかつた」と記すだけなのである。

なお、女性を「かかあ」としてしか見ない古賀の見解は、相手の女性の意思を無視して、「僕」に見合いを勧める「僕」の母親の結婚観、すなわち、〈号令結婚〉や〈脅迫結婚〉を擁護する見方にも近いものである（佐伯1998:125）。家父長制を円滑に維持するためには、「青年男女のnaivelyな恋愛」をいわずに追求する「僕」よりも、「硬派中の鏘々たるもの」であった古賀のほうがふさわしいということまでもこのテキストでは暗に示されているのである。

ここで先ほど触れた「自然／不自然」の二項対立に照らし合わせてみると、古賀が「特別な保護を加へてゐ」た美少年の安達は、「自然の懷」であるところの「女色」を通して「墮落」し、「退学させられ」、浅草区の「子守女や後家などに騒がれる美男の巡查」を経て、「女の軽技師」の「情夫」になるという「末路」をたどる（森1972:142-143）。それに対して、「不自然の回抱」の主体であったはずの古賀は「墮落」する気配もなく、卒

業後は「某省の参事官」になっている。つまり、キース・ヴィンセントが指摘するように、語り手の「僕」は「男色」を語る際に精神医学の見地に立っていたにもかかわらず、「不自然」な行為を行なう「硬派」が「孝心を実践するとか勤勉に学んで国家に奉仕するとかいった伝統的な価値を他の誰にもまして支えることができるということ」（Vincet 1998:129）を認めてしまっているのである。

おわりに

さて、金井湛は、「五月雨」の夜に、これまで綴ってきた「性欲の歴史」を「静に巻の首から読み返して見た」。そして、いったん、「どうも自分は人並はずれの冷澹な男であるらしい」と結論を出す（森1972:175-178）。

だがすぐに彼は「考へ直」す。金井は自分が「冷澹」なのではなく、「三角同盟」の中で「性欲の虎を馴らして抑へ」たため、「性欲」を制御するようになったのだと肯定的に述べるのである。その結果、「Uriditasとでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいか」という不安は否定され、その後にあった「Homosexualität」とでも名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいか」という疑念も解消される

(森 1972: 178)。そして金井は「性欲の歴史」を綴った書物に、

明らかにクラフト＝エビングの *Psychopathia Sexualis* を想起させる“VITA SEXUALIS”とラテン語のタイトルを付け、「文庫の中へばたりと投げ込」(森 1972: 179) ものである。

しかし、金井の〈正常性〉を立証するための「三角同盟」が、古賀の「男色」から「活気」を得ていたことを忘れてはならない。テキストでは、金井が〈正常〉になるためには、精神医学においては〈異常〉なものである同性愛を原動力とした絆を通過することが不可欠だという奇妙なねじれが発生してしまうの

である。

そのタイトルが示唆するとおり、『キタ・セクスアリス』では、一見、精神医学の見解に従って「男色」が医学的に解釈しなおされるかのように思われる。だが実際にはこれまで本稿で論じてきたように、精神医学の知見に基づいた「Uring」たる素質のほうが無効化されることになるのである。つまり、『キタ・セクスアリス』とは、「Uring」たる素質が「男色」表象に生じさせる混乱を通じて、医学・精神医学言説への懐疑を喚起するテキストであると言えるのではないだろうか⁽³⁾。

註

(1) 前川論文では、二〇世紀になり、女学生の数が増えたことが男子学生同士の親密な関係に影響を及ぼしたことが指摘されている。『キタ・セクスアリス』で回顧的に描かれているような、男子学生を「墮落」させる芸妓や遊郭の女性ではなく、結婚や家庭の形成へと繋がる女学生が登場したことによって、「男色」も「女色」へのアンチテーゼではなく、やがてそこへ至るべき「男女間の恋」の「代替物」ととらえられるようになったのである(前川 2007: 13-16)。語り手の金井湛が位置している明

治四〇年代は、こうした学生の「男色」の変容をすでに経た時代である。

(2) 現在、「Uring」という言葉はほとんど用いられないが、精神医学や性欲学が花開いた一八八〇年代から二〇世紀前半にかけては、ポピュラーな用語であった。鵜外も早い時期から「Uring」を用いている。一八八九年に発表されたエッセイ「外情の事を録す」では、「男の男と交はるもの」を「外情」と定義し、そこに「Uringhum」というドイツ語を加えている。

引用文献

- さらに、「かげま」すなわち、男娼を「Urning」と言い換えてゐる(森 1974: 155)。
- (3) 『キタ・セクスアリス』では「Urning たる素質」が無効化される段階にとどまっていたが、鷗外が明治四三年から四四年にかけて『スバル』に連載した小説『青年』では、さりげなく、しかし見逃すことができないやり方で精神医学における同性愛に対する見解の再解釈が目論まれている。この点に関しては、拙稿「homosexual」の導入とその変容——森鷗外『青年』(『論叢クイア』第一号、二〇〇八年九月、五七—七五頁)を参照してください。
- 岩波書店 一九七二年。
- 『月草叙』(一八九六年)『鷗外全集』第二三巻、岩波書店、一九七三年、二九四—三〇一頁。
- 『外情の事を録す』(一八八九年)『鷗外全集』第二九巻、岩波書店、一九七四年、一五四—一五六頁。
- 永井荷風『祝盃』(一九〇九年)『荷風全集』第四巻、岩波書店、一九六四年。
- Plugfelder, Gregory. *Cartographies of Desire: Male-male Sexuality in Japanese Discourse, 1600-1950*. University of California Press, 1999.
- Reichert, Jim. *In the Company of Men: Representations of Male-male Sexuality in Meiji Literature*. Stanford University Press, 2006.
- 佐伯順子『色』と『愛』の比較文化史』岩波書店、一九九八年。
- 斎藤光「セクシュアリティ研究の現状と課題」『セクシュアリティの
- Foucault, Michel. *Histoire de la sexualité 1: la volonté de savoir*. Gallimard, 1976.
- Greenberg, David. *The Construction of Homosexuality*. University of Chicago Press, 1988.
- 古川誠「セクシュアリティの変容——近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』第一七号、一九九四年、二九五—二五五頁。
- 河岡潮風「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」『冒險世界』一九〇九年八月号、六七—七九頁。
- Krafft-Ebing, R. von Richard. *Psychopathia Sexualis*. 1886. = 『変態性慾心理』(黒澤良臣訳)大日本文明協会、一九二三年。
- 前川直哉「明治期における学生男色イメージの変容——女学生の登場に注目して」『教育社会学研究』第八一集、二〇〇七年、五一—二二頁。
- 森鷗外『キタ・セクスアリス』(一九〇九年)『鷗外全集』第五巻、

社会学』井上俊〔ほか〕編、岩波書店、一九九六年、二二三—二四九頁。

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the Closet*. University of California Press, 1990. = 『クローゼットの認識論——セクシュエリティの二〇世紀』外岡尚美訳、青土社、一九九九年。

坪内逍遙『当世書生気質』(一八八五—八六年)『明治の文学』第四卷、筑摩書房、二〇〇二年。

月川和雄「解放運動の先駆者たち」『Imago』一九九五年十一月号、

一七六—二〇〇頁。

生方智子『「キタ・セクスアリス」と男色の問題系——ジェンダーとセクシュエリティの結節点に向けて』『日本文学』一九九八年十一月号、三六—四六頁。

Vincent, James Keith. "Homotascism and Its Discontents in the Work of Oe Kenzaburo and Mishima Yukio." 『大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモファシズムとその不満』竹内孝宏訳『批評空間』第Ⅱ期第一六号、一九九八年、一二九—一五四頁。

(くろいわ ゆういち／博士研究員)